

現代における日本民話の機能的対応物

トム・スピリアールツ

一、序論

日本は、西洋の諸国と比較して、民話の無尽蔵の宝庫であるように思われる。これらの民話は数世紀にわたって伝えられ、今日でも山里の村々や近海の島々で聞くことができる。日本における民話の科学的収集と研究は、ヨーロッパに一世紀遅れて始まった。さらに、柳田国男の『遠野物語』が発表されて以来、日本民話ブームとでも言える現象が現われた。これだけでも西洋のジャパノロジストの注目を集める価値があるように思われる。

二、生きている観念の研究

民話は、それが単に新しい出来事の報告、遠い過去の伝説であろうとも、あるいは、多様で複雑な昔話であろうとも、民衆にとつて、娯楽、情報として機能し、教訓的英雄的な行為を聞く楽しみや、生活の諸現象に対する宗教的根拠を与え、さらには、単調な生活から

解放されたいという渴望をも常に満足させるものである。民話が所与の文化圏に属する常民の宗教的・社会的・個人的な要求から生じた文化現象である以上、当の文化に関して、多様な情報を内包していると考えられる。従って、日本の伝承文芸は日本人の行動様式と生活上の様々な事実に關して、日本人が抱いている観念等を示唆するものである。いわば、日本の民話は、日本人の多様な世界観を構成する民俗観念(1)を含有するものであると言える。

日本でも、民話を含めて、多くの民間伝承は広範な都市化や現代化の圧力によって消滅の危機に瀕している。過去において、神話や昔話や伝説の中に生き生きと表現されていた民俗観念は、現代ではどのように存続し得るのだろうか。単に民話研究者の為の文献、資料としてのみ存続を認められるのであろうか。この民俗観念は、現代においては、たとえ形態や形式が異っているにもかかわらず、映画、コマ・シヤル、空想科学小説、漫画等、一般に大衆文学とマスメディアの中に見出しうる可能性があるのではないだろうか。たとえば、日本の漫画は、民俗学者にとつて、新しい研究分野として考えられるべきものであり、伝承文芸における民俗観念の継続性あ

るいは断続性をこの中に見出しうる可能性があるように思われる。アラン・ダンス (Alan Dundes) に従えば、民俗学者にとって、

最も重要な任務は、文化や民族間の交流を改善することであり、その為には、常民の間に生きてゐる観念 (folk ideas) を調査・研究の対象とする必要がある。この諸観念は、民間伝承の一つのジャンルを構成するばかりではなく、神話、民謡、諺、伝説、SF等、多様なジャンルから蒸溜することができる。国際化が進み、文化や民族の観念が絶えず接触する今日、様々な誤解や撞着が表面化している。これら相互に異つた様々な観念の衝突こそ、諸文化間のコミュニケーションに困難をもたらす要因である。これらの観念が無意識的かつ不確定な前提である以上、対立の特殊な細部を指摘することは容易なことではない。従つて、民俗学者にとって、一つの選択が必要なのではないだろうか。即ち、常設の「遺物博物館」を建てる為に、過去の諸継承物を収集し、保存することに専念するか、あるいは、民俗学を人間思想の研究とみなして、常民の間に生きてゐる観念の研究に専念するか、どちらかであるように思われる。後者を選択した民俗学者は、必然的に範囲を広げて、大衆文学をも研究分野と見なすべきであろう。

三、伝統と現代都市

柳田国男学派の民俗学者の間では、「伝統」という概念が中心となつていた。実際は、「民間伝承」という語は「民俗」との同意語である。それは恐らく鹿鳴館時代に対する反動による民族的覚醒と

関連するものであろう。この時以来、民俗学者は日本民間文化の遺産を保存しようと努力してきたのである。

第二次世界大戦敗戦後、日本文化の遺産は再び危機に見舞われた。この悲惨な戦争による生活環境の変化は、日本史上、例を見ないのであった。「精緻な温室育ちの花である日本文化」は、高まる国際化の風潮の中で、果して、このまま存続し得るのであろうか。大都市では、日本人はアメリカ人あるいはヨーロッパ人と同様な生活を送っているにもかかわらず、日本人の行動様式や社会に対する心的態度には、アメリカ人やヨーロッパ人との間はかなり相違がある。従つて、日本人の生活習慣・生活態度を理解する為には、日本文化の流れの伝統的な基盤に関する知識が必要であることは言うまでもない。さらに、その上で、今日、日本民族の間に存続している継続的な観念を研究する必要があるだろう。いいかえれば、大都市の給与生活者は以前の水田稲作農耕作者と同様に、民俗学研究的対象と考えられるべきである。日本をフィールドとする民俗学研究者にとつても、以下の研究対象の選択が必要であらう。即ち、過去の不易の「民俗」に関する研究か、あるいは、現代において不断に変容しつつ、なおかつ生き続ける「民俗」の研究か、という選択である。一年にわたる調査研究をもとにし一九六二年『日本の民話』を公刊した民俗学者リチャード・M・ドーンソン (Richard M. Dorson) は、一九七二年に「毎日東京での生活が体験できるにもかかわらず、農村においてのみフィールド・ワークを行った」と述べている。しかしながら、この十年の間に民俗学には、全く新しいアプローチの方法が生み出されている。すなわち、現代の「常民」の研究は「村」

のみではなく、都市をも対象として行われるに至った。「都市の産業化による水田稲作農耕文化の破壊は、伝統として存続し得る物価値を産み出さない」という理論は捨象されたのである。従来、柳田学派は専ら過去の常民を中心として、原始時代の仏教以前の民間信仰を復元しようとした。柳田は国学者として、日本文化における外国からの要素と影響を取り除こうとした。それ故に、新しい産業化した都市の社会からの産物は明らかに無視された。当時の理論によれば、「産業革命は常民の創造力を無くさせ、民間信仰を永続させる田園のリズムを消滅させる」のである。

柳田の生きた時代においては、レヴィ・ストロースの言うところの「伝統文化と現代文化の間の両極性（文盲の人対読み書きのできる人、口述の伝達対マスコミなど）」は、まだある程度はつきりし、観察が容易であった。しかしながら、今日ではこのような対極性はすでに明白なものではなくなってしまった。確かに、従来の伝統文化の諸構成要素はもはや目にするのができなくなつたが、それにかわつて、別の伝統的な諸要素が新しい顔を持ちながら、都市の環境に生き続けている。この様に現代都市では、かつての貴族・武士の階層にかわつて、いわゆるサラリーマン階層が主流を占めている。ところで、マスコミは、民話の存在自体を借用したものだといふ批判が聞かれる。ところが、ある民俗学者は、それはただ民話が変わつたのだという認識を示して見せた。ラジオ、テレビ、雑誌、小説、あいさつ状等は話言葉によるコミュニケーションより早く民俗観念を流布させる。民話が過去において限定された村落共同体の要求に適っていたのと同様に、一つの文化を形成する大衆の要求は

マスコミによって適えられるのである。従つて、マスコミの諸ジャンルには、しばしば伝承文芸と同一の観念や情緒を認めることができる。一例として、「判官びいき」という表現が意味する心的態度は、海の部族の諸伝説、丹後風土記、義経記や大衆文学の股旅物や剣豪物にも認めることができる。更に、日本の漫画のスーパーヒーローはアメリカのそれと比べると、根底的に異なっている。この事実を明確にする為には、それぞれのスーパーヒーローの伝統の発生の経緯を指摘する必要がある。

ドイツの民話研究者ロルフ・ブレドニヒ(Rolf Breidnich)は、「民話の研究は、現在と結び付かない、単なる秘儀的、歴史的な学問内学問に落ち入る前に、漫画や大衆（あるいは基層）文学の諸ジャンルを研究分野に引き込まなければならない」と述べている。商業化した社会において、漫画は過去の民話や神話の「機能的な対応物」である。民話と絵画表現は昔から類縁関係があつた。エジプトの宝庫、ギリシアの瓶、等には話の主題が絵によつて表現されている。鳥獣戯画は日本最古の語り物としての連続絵で、漫画の初期形態とも考えられるものである。漫画はもちろんただの消費財ではない。隔離された群島の文明においては、神話、昔話、伝説は、古代より民衆の学術、医術、立法や信仰生活に属し、重要な役割を果してきた。この事實は、日本における漫画が、現代においてことほど左様に重要な現象であることを傍証する糸口となる可能性があるのではないだろうか。漫画が表明する世界観はむしろ保守的で、しっかりした社会を反映する。同時に、漫画は、個人的な主張を強く表現することを避ける、混沌とした世界に住む民族の空想や憧れや抑圧さ

れた感情を表現しているのである。

四、もう一つの世界

他方、民俗観念は大衆文学やマスメディアにのみ見いだされるといふ訳ではなく、常民の日常生活の中にも変容した姿で生きている。昔、稲田で農民によって挙行された迷信や儀式は、今日においても会社の事務室でサラリーマンによって行なわれていると言える。この迷信や儀式は、日本の民間信仰に深く植えつけられており、日本人の宇宙論を反映しているのである。

日本の神話、昔話、伝説の中で、我々は繰り返し精霊や祖先の霊の住む「もう一つの世界」⁽¹⁴⁾に向かい合わされる。曖昧さや撞着に満ちた世界である。それは先史以来様々な民族が固有の宇宙論を日本へ持ち込んだからではないだろうか。さらに、これらの様々な宇宙論の全ての混合物に、仏教の宇宙観が投影されたのである。

「三つのもう一つの世界」という表現がある。すなわち、「高天原」と「夜見国」と「常世の国」であるが、一般的に言えば、二つの宇宙論、水平と垂直の宇宙論とに分けることができるだろう。古事記と日本書紀の神話の宇宙論は、主に垂直的である。人間界は神が住む高天原と死の夜見国の間にある。南方から渡来し、先住の縄文民族と接触したメラネシアや南中国の民族は、水田稲作農耕文化や女性のシャーマンを伴う母系社会を導入し、又太陽女神を崇拜し、石の男根像の様な象徴を信仰していた。

さらに、三、四世紀ごろ、政治的・軍事的により勢力のある、新

しい民族が朝鮮を経て、日本に渡来した。この冶金の技術を持つ騎馬の民の宗教制度は、父系社会、天界の神の崇拜、英雄の神格化、天から山や木のいただきまで下る神の信仰などの特性を示す。かくして、「もう一つの世界」を描く古事記の神話は主にこの垂直の宇宙論を持つ移民によって作り上げられたのである。

しかしながら、日本における最古の宇宙論は水平の軸に位置していた。海に向こう側のどこかに常世の国があり、その永遠の国から規則正しい時期に「客人」⁽¹⁵⁾といわれる怪しげな民が日本の海岸にやって来たのである。この客人は収穫期、あるいは新年のころすでに在住していた日本人に生気を与えて来た、神格化された死者であり、この神性の客の再訪は稲の種に胚の力を入れ、田畑の豊饒を約束させ、島国の民を災害から守って来たのである。これらの中に、一方では稲の生活環、他方では人間の生活環を認めることができる。常世の国の位置は曖昧で、海に向こう側にも海の下にもある筈である。

C・アウエハント (Cornelius Uvveland) は、海底の常世の国を日本書紀の浦島子の話と関係づけた。浦島子の話と相関している海の幸・山の幸の話は又、龍宮入りといわれる話の型に属する。この種の話では、淵や湖や塚が人を海底にある龍宮の風変わりな世界まで導く。この海底界はいつも幸福や恵みのもととして認められる。幸福の観念と結び付く、水の世界に起こる他の話に、一寸法師、挑太郎、瓜子姫、輝姫、その他の龍宮童子の話がある。この種の内容はそのれぞれ相違しているが類似点もかなりある。すなわち、話に登場する子供の英雄は水という概念と固く結び付いており、しかも竹の子、西瓜、挑など「神の子」が宿るものが必ず現われる。本来

これらの果菜は空(うつぼ)の特質を示していた。換言すれば、その果菜は見たところ何も入っていないが、実は神体の様な魂によって塞がれているのである。さらに、この果菜は水祭あるいは夏祭に重要な役割を果たした。これらの祭においては、雨の少ない夏に灌溉を確実にし、田畑を虫の害から守る役を果たしたのである。農民は悪疫の時に瓜を空ろにして、病気を追い出す守を入れたり、様々な魔術の実践の為に使用した。又、常世波で進む七福人の宝船は蘿麗の皮で作られ、仕合わせを持たらし、不純物を持ち帰ることによって、瓜子姫や挑太郎の果と同じような機能を果たしたのである。龍宮童子の話は椀貸の伝説と直接に関連づけられる。この諸伝説では、人間は水の神(蛇、河童、鯉、等)から椀を頂く。この椀も内部が空虚(うろ)である果菜と同様に、「もう一つの世界」の生命力が入っている「聖器」と考えられる。

常世の国あるいは海底の龍宮の「もう一つの世界」という観念は恐らく日本の海岸に居住していた水田稲作農耕民によって生み出されたものであろう。先史時代、内陸部への大規模な移住により、日本民族の生活環境はかなり変化した。

魔術による生命力をもちた客はもはや海岸地域においては、歓迎されなくなり、山や円錐形の丘において歓迎され始めたのである。このような山は、精霊や祖先の霊の新しい住居になった。この垂直の宇宙論への変遷は恐らく漸次的なものであったであろう。それ故内地には「山村の龍宮信仰」が存在したのである。水面下の神との通信は、以前と同様に、「海⁽¹⁸⁾の目」である湖や池や泉を通して可能であった。このように、水の神と山の神との間の相互作用によ

って、河童や山姥のような擬人化された奇怪な化物が生まれ始めた。このような化物が住むアンビヴァレントな山の世界は、同時に死者の究極の目的地であり、生命の起源でもある。そこにある水の世界は一層アンビヴァレントであり、山姥や河童の積極的であると同時に消極的性質を確認することができる。例えば、金時の母は山姥の世界に属し、神童である金時は自分の神通力が入った盃から自らを分離することができなかった。又、積極的であると同時に消極的な性質を持つ河童は、生命の水を、桃太郎の桃や金時の盃と同じような機能を果たす、くぼんだ頭に入れる。このコンテキストでは、河童と空虚(うろ)構造を持つ果菜との間の顕著な関係が目を引く。河童は特に胡瓜に対して嗜好を持ち、壱岐の島では祇園祭の禁忌期間に河童を呼び出すことがないように胡瓜を食べない。別のある地方では、この胡瓜を水神・河童へ奉納し、山や川の回りに置く。この魔術の儀式は、豊作に対する河童の愛顧を得る為に行なわれて来たものであろう。

現代において、このような儀式とその関連概念はどのような形態の下に見い出すことができるだろうか。筆者が一年前、一ヶ月間勤務していた大阪のある会社では、七月の末ごろ、事務室に「夏祭」と呼ばれる「お祭騒」があった。机やいすを移して、祭場になった事務所では、色々な遊戯が行なわれた。その中で、興味を引いたものは、水と関連し、しかも「空虚(うろ)」を備えた容器ないしは物による遊戯であった。例えば、水を入れた水槽の底に置かれた皿の中に硬貨を沈める遊戯、水が入った風船玉を釣るヨーヨー釣というゲーム、目隠しされたままオールドで西瓜をねらい打つというような

ゲームである。これらの遊戯は、上に述べた伝説や儀式とは無関係なものであろうか。かつての農民と同様に、現代のサラリーマンも自らの幸福やあるいは豊穡（＝好景気）を祈りはしなうか。

五、常民の世界観の深層

こうした民俗の構造分析は常民の世界観の深層を開示できる可能性がある。宮田登が示唆している様に「いつも身近にあつて何でもないようにみえる事象から民俗をとらえようとする視点をもちことが大切」なのである。自己の属する文化とは異った文化の世界観を理解することは容易なことではないが、構造の諸相を確認することによって、同時に自己の文化の世界観の基本的な本性をも確認する作業に関連があるものであろう。

【註】

- (一) Dundes, A., *Toward new perspectives in folklore*, pp. 93-103.
 - (二) Idem.
 - (三) 福田アジオ・宮田登編『日本民俗学概論』吉川弘文館、一九八三年、二八〇頁参照。
 - (四) Umesao, T., *Le Japon à l'ère planétaire*, Paris, 1983, p. 143.
 - (五) Dorson, R. M., *Folk legends of Japan*, Bloomington, Indiana, 1962.
 - (六) Dorson, R. M., *Folklore; selected essays*, p. 35.
 - (七) 福田アジオ・宮田登編、op. cit., p. 277, 参照。
 - (八) Idem, p. 272, 参照。
 - (九) Dorson, R. M., *Folklore in a modern world*, p. 32.
 - (十) Idem.
 - (十一) 特リチャード・M・フーンン学派の民俗学書。
 - (十二) Bretnich, R. W., *Die Comic Strips, als Gegenstand der Erzählforschung*, *Folk Narrative Research*, Studia Fennica 20, Helsinki, 1976, p. 230.
 - (十三) Idem.
 - (十四) Blacker, C., *The catalpa bow, a study of shamanistic practices in Japan*, London, 1975, p. 9.
 - (十五) Hori, I., *Folk religion in Japan, continuity and change*, Chicago, 1968, pp. 102-103.
 - (十六) Ouwehand, C., *Namazur-e and their themes*, Leiden, 1964, p. 85.
 - (十七) Idem.
 - (十八) Ouwehand, C., op. cit., p. 97.
 - (十九) ダイキン本社、大阪市北区梅田一丁目一二番三九号新阪急ビル
 - (二十) 福田アジオ・宮田登編、op. cit., p. 273.
- (付記) 本論文は、一九八五年六月、ベルギーのルーヴァン・カトリック大学哲学・文学部に提出した学士論文「日本民話——新しい日本民俗学研究の一試論」の主旨に沿い、さらに若干の自説を補った概要である。(東京大学大学院)